

# N I C U における早期母乳育児支援

— 低出生体重児に直接母乳導入を試みて —

1 病棟 4 階東

○三浦香代子 松本まり子 吉原理恵子  
森陽子 斎藤恵子

## I. はじめに

母乳は、新生児において免疫・栄養学的に最適で、その母乳を母親のおっぱいを通して児に与えることで、親子間の愛着が生まれ、母子関係の確立に重要な役割を果たす。

N I C U に入院する児の多くは、出生直後からの長期母子分離を余儀なくされる。それに伴い、母親の精神疲労や吸啜による乳頭刺激が得られない状況が続き、母乳の分泌維持や母子関係の確立に困難を来してしまう。

これまで当 N I C U では、母親の精神的支援として、児の様子を記した「すくすく日記」の交換やだっこを中心とした面会を行ってきたが、母乳育児支援については、搾母乳を届けてもらうだけで、それ以上の積極的な支援は実施していなかった。

しかし、最近の「すくすく日記」に「もっともっとミルクを届けてあげたいのですが・・・だんだん出なくなってきた・・・ごめんね」という母乳に関するコメントが多く見られるようになった。母乳分泌量の減少が母親をより一層不安定にすることを知り、母親への母乳育児支援の必要性を感じた。

そこで今回私達は、可能な限り早期からの直接母乳（以下直母と略す）導入を試みた。その結果、母子関係の確立に有効な関わりができ、今後の方向性が見い出せたのでここに報告する。

## II. 研究期間

1998年9月～1999年7月

## III. 研究方法

直母導入にあたり、準備と実施の2期に分けて研究方法を述べる。

### 1. 第1期：現状把握～直母導入までの準備

#### 1) 母乳育児支援の現状把握

当 N I C U において、直母が実施できなかった状況を明確にする。

- (1) 入室児の多くが早産・低出生体重児であり、呼吸管理・点滴管理・モニター管理など全身の集中管理を要し、また感染に対する抵抗力が弱い。
- (2) N I C U は、常に救命救急の場であるという意識が強く、児が急性期を脱しても早期からの育児支援を行っていなかった。
- (3) 現在の当 N I C U における経口哺乳開始時期は、嚥下反射が確立される36週以降であり、面会時の育児支援ではピン授乳までしか行っておらず、直母には至っていなかった。

た。

- (4) NICU看護婦は乳房管理についての知識に乏しく、効果的なアドバイスが行えない。
- (5) 施設構造上、授乳室がなく、プライバシーを考慮したスペースを確保出来ない。

## 2) 直母導入方法の検討

### (1) 対象児の選択

児の安全を考慮したうえで可能な限りの早期直母を設定し、具体的基準について看護研究グループで検討を行った。その結果、以下の3項目を基準とした。

表1. 直母開始基準

基準項目	理由
修正在胎週数 33週以上	直母実施中に、乳頭刺激により分泌された母乳で児がむせる事がないように、嚥下反射が確立し始める週数とする。
体重 1300g以上	現在行っているクベース外抱っこで、バスタオル・着衣により体温管理が行える体重。
抜管しており酸素 を使用していない 重篤でない	母親が直母を実施するうえで、安心して児に対応出来る。 児が乳首をふくむうえでの危険性が少なく、安全面を考慮する。

### (2) 母親に対するアプローチ

母親の母乳に対する意識や、乳房・乳頭についての状態把握の為「データベース」(図2参照)を作成した。また、母乳分泌量・実施時の母子の状態変化を知るために「おっぱいノート」(図3参照)を作成し、直母実施時に毎回記入できるものとした。

次に、母親の不安を軽減させ興味をもって取り組めるように、あえて医学書ではなく、受け入れやすい優しい言葉で表現してある市販の育児雑誌を参考に、パンフレット「はじめてのおっぱい」を作成した。

### (3) 直母実施における母親の心理的変化の把握と手技的評価

実施における評価はアンケートを用い、母親の心理的変化を追うと共に手技的評価を行う事とした。アンケートは、実施前後の変化、開始してからの変化を追いやすくするために直母実施前を「おっぱいを吸わせる前に」(アンケートA)、開始後を「直接おっぱいを吸わせてみて」(アンケートB)とし内容別に2種類作成した。記載方法については、母親の素直な意見を聞くために、聞き取りではなく母親本人による記述方式とした。また手技的評価についてのアンケートは、直母実施における今後の指標と成り得るよう、総括的な項目も含め「面会を振り返って」(アンケートC)を作成した。

### (4) 看護婦間の統一

直母導入の目的や手技の統一を図り、スムーズに業務に取り入れられるようにマニュアルを作成した。

## 2. 第2期：直母実施

第1期で作成したものを使用し、実施していくために、具体的に時期・方法を記入する「チェックリスト」を作成し、図1の手順に沿って実施した。直母開始のアプローチについては、主として受け持ち看護婦が行う事とした。また母親が直母に慣れるまで、出来るだけ受け持ち看護婦が指導できるように、面会日の配慮を行った。

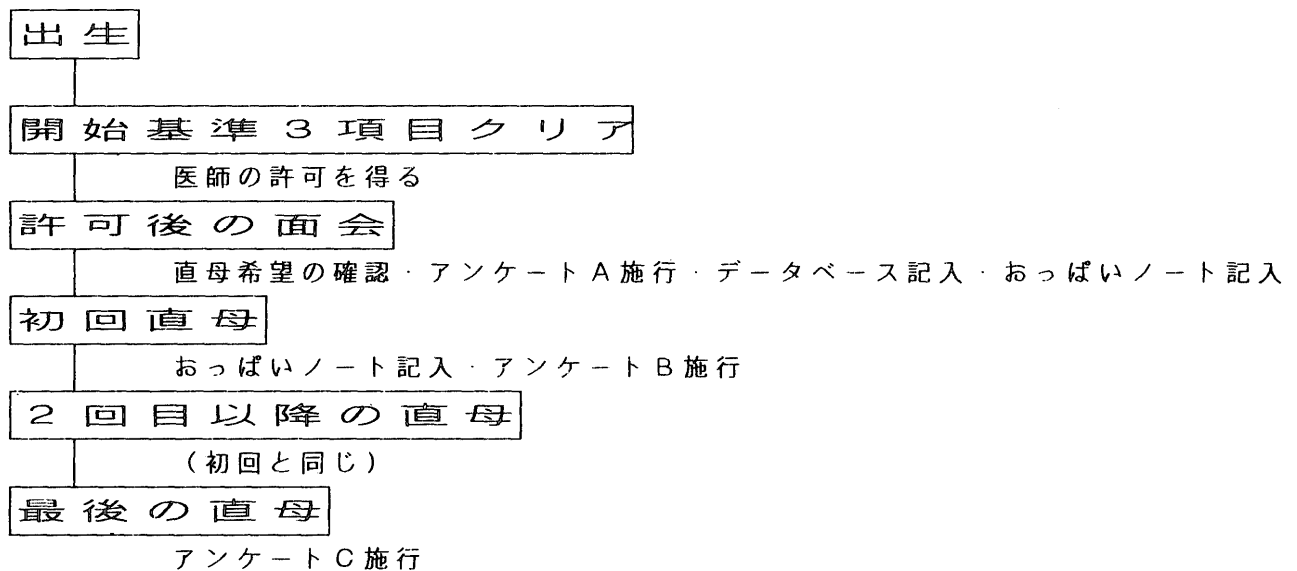


図1. 直母実施手順

#### IV 結果及び考察 (表2・3参照)

##### 1 児の条件と開始時期について

5名の児を対象に修正在胎週数36~40週の時期に開始し実施した。その結果、児は低酸素や低体温を来す事はなかった。また、母親へのアンケートから開始時期について全員が「適当である」と答えており、直母を中断することなく継続して行えた。開始時期にばらつきが生じたのは、出生当初より個々の児の状態に相違があったためと考える。しかし、最初に決めた基準と開始時期の間に多少の遅れが見られたものの、児の状態の安定を確認したうえで実施したことにより、児への問題を起こすことなく安全に行えたと考える。また母親においても継続して直母が実施できていたことから、児の条件・直母導入時期において適切であったと考える。

##### 2. 母の状態把握とアプローチについて

今回の直母において、児が吸啜に困難を来すケースがなく、スムーズに実施できた。しかし、「おっぱいノート」から乳房ケアについての出産前指導は母親全員が搾乳の方法しか指導を受けていない事がわかった。今後、陥没・偏平乳頭など児の吸啜に困難を来し、直母がスムーズに行えない症例に出会う可能性が考えられる。そのため、助産婦と母子についての情報を共有し、出産前後の乳房ケアの専門的指導とNICUスタッフとしての知識・指導の充実が望まれる。

また、直母実施に伴いパンフレットを用い指導を行ったところ、母親全員が「わかりやすい」と答えた。また、「慣れるまで担当看護婦がそばにいてくれてよかった」などのコメントが得られた。これは、受け持ち看護婦が一貫した個別指導を行ったことにより、母親との信頼関係が築けたためと考える。

##### 3. 早期直接母乳前後の母親の心理的变化と乳汁分泌状態について

4名の母親は、直母実施前より母乳分泌は良好であり、実施後分泌量に変化はなく維持できていた。ただ、1名の母親は実施前より母乳分泌量が減少しており、停止間近の状態であった。この母親に対する直母については、文献により、出産後60日ごろまでは児の吸啜による乳頭刺激で母乳分泌が促進されるとされていたため、母親の意志を確認し実施

した。しかし結果は、母乳量の増加は見られず横這いであった。今回症例数が少なく、母乳分泌維持・促進という明らかな結果がないため、今後も経過を追って行く必要がある。

次に母親へのアンケートの結果、4名の母親はすべての時期で児を肯定・受容する接近感情を示していた。しかし、1名の母親については開始前のアンケートから、直母を希望するも「苦しそう」という児を否定・拒否する回避感情を示していた。そこで、実施時には母親の言動に注意し、時間をかけてゆっくりと指導・説明を行ったところ、直母導入後は回避感情は見られなくなり、スムーズに直母が行えた。小池<sup>1)</sup>は「出生直後の赤子を見るからに無力で、母子間の主導権はだれでも母親にあると考える。しかし、実際にはその弱々しさにも母親を動かす力がある。」と述べている。私達援助者が適切な時期・方法で直母開始のアプローチを行えば、母親の感情は児によって動かされ、児への愛着増進や母子関係の確立につながると考える。また、今回の研究においては明らかに出来なかったが、適切な時期に直母を開始することで、母親の児への愛着が強まり、母乳分泌にも少なからず影響が出てくるのではないかと考える。

今まで、当NICUでは、早期からの母子接触の必要性を各自が十分に認識していたにもかかわらず、救命第一という意識から、両親に対し次のステップの育児支援を促す事が出来ていなかった。しかし近年では、新生児医療の目的が児の後遺症なき生存から生活の質の向上へと進化してきており、早期からの両親への育児支援の介入が重要となってきている。そこで私達は早期直接母乳支援に着目した。

今回、少ない症例であったが、NICUにおける母乳育児支援の利点を確信することができた。また、NICUでの面会や乳房ケアを含めた新たな問題点も見いだす事ができた。今後直母を継続していくうえで、これらの問題点解決へ取り組み、よりよい家族ケア・母乳育児支援を行っていきたい。

## V. まとめ

1. 当NICUの母乳育児支援における現状での問題点を明確にし、早期直接母乳支援の必要性を認識した。
2. 直接母乳の為の手順を作成し、導入した。
3. 早期直接母乳は、母親の愛着増進と母子関係の確立に重要な意味をもつことが分かった。

## <引用文献>

- 1) 小池 通夫：母乳と母子相互作用、小児看護、Vol17, no11: P1471, 1994.

## <参考文献>

- 1) 渡辺 順子、入江 暁子：当院における母乳育児支援、Neonatal Care, Vol11, No8: P16~22, 1998.
- 2) 福田 雅文：母乳育児への援助、小児看護、Vol20, No9: P1227~1280, 1997.
- 3) 橋本 武夫編集：新生児と母乳、NICU増刊、メディカ出版、1992.
- 4) 坂井 一之編集：ひよこクラブ特別編集 育児大百科、株式会社ベネッセコーポレーション、1998.

5) 室岡 一他：乳房管理と母乳育児指導、ペリネイタルケア編集、メディカ出版、1987

6) 服部 律子他：親子教育の実践と課題、Neonatal Care. Vol11. No5: P49~56. 1998.

表2. 対象児の背景

患児	在胎週数	出生体重	初回直母 開始日齢	修正 在胎週数	初回直母 時の体重
A	30週 0日	1050g	53生日	37週 4日	1340g
B	32週 6日	1776g	23生日	36週 1日	2208g
C	31週 5日	1522g	23生日	37週 4日	1732g
D	31週 3日	944g	57生日	39週 4日	1414g
E	29週 2日	896g	76生日	40週 1日	1284g

表3. 母親の背景

母親	年齢	初・経産婦	母乳分泌量 の変化	直母 施行回数
A	33歳	初産婦	変化なし	6回
B	29歳	初産婦	変化なし	3回
C	36歳	初産婦	変化なし	7回
D	29歳	初産婦	変化なし	5回
E	33歳	初産婦	変化なし	継続中

出産前指導について

- 直母指導 無 有 (指導内容) )
- 乳房管理 無 有 (指導内容) )

母乳栄養に対する意向

- a : 母乳で育てたい
- b : できれば母乳で育てたい
- c : 人工栄養

前回の見について

家族 (子供) 構成

- a : 母乳のみ
  - b : 母乳と栄養の混合
  - c : 人工栄養のみ
- N : NICU入院経験

前の子に対して困ったこと

[ ]

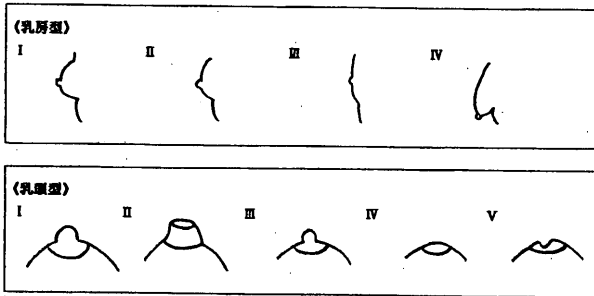


図 2 . データベース

月 日	押れる 量 g	押乳の 回数	お乳の状態			お乳の量について		
			1(6分)	2(6分)	3(15分)	1(6分)	2(6分)	3(15分)
/	m l	回	1	2	3	1	2	3
/	m l	回	1	2	3	1	2	3
/	m l	回	1	2	3	1	2	3
/	m l	回	1	2	3	1	2	3
/	m l	回	1	2	3	1	2	3
/	m l	回	1	2	3	1	2	3
/	m l	回	1	2	3	1	2	3
/	m l	回	1	2	3	1	2	3
/	m l	回	1	2	3	1	2	3
/	m l	回	1	2	3	1	2	3

所 属 病 院	赤ちゃんの 状態	評 価				母体からの コメント	看護者からの コメント
		睡 し か け	抱 き 方	含 ませ 方	吸 乳		
T P R	SpO <sub>2</sub>						
四肢冷感(有無)							
T P R	SpO <sub>2</sub>						
四肢冷感(有無)							
T P R	SpO <sub>2</sub>						
四肢冷感(有無)							
T P R	SpO <sub>2</sub>						
四肢冷感(有無)							
T P R	SpO <sub>2</sub>						
四肢冷感(有無)							
T P R	SpO <sub>2</sub>						
四肢冷感(有無)							
T P R	SpO <sub>2</sub>						
四肢冷感(有無)							

図 3 . おっぱいノート